

「自閉スペクトラム症/注意欠如・多動症傾向の中学生が抱える困難を 尋ねるための質問紙」の開発

—多数例および診断の有無による信頼性・妥当性検討—

久保木智洸¹⁾、高橋知音²⁾、篠山大明³⁾

¹⁾信州大学総合医理工学研究科、²⁾信州大学学術研究院教育学系、³⁾信州大学学術研究院医学系

<要 旨>

ASD・ADHD 的な傾向を持ちながらも、周囲から見ると大きな問題が生じておらず、本人が日常生活において困っていたとしても、適切な支援を受けられずに過ごしている子どもは一定数存在していると考えられる。そのような児童生徒をスクリーニングするために、筆者は 2021 年度に中学生を対象とし ASD・ADHD 的な傾向により日常生活で抱えている困難を尋ねるための自記式質問紙の試作版開発を行った。しかし試作版開発時には回答者数が少なく、項目間の相関が高かったことから、いくつかの課題が残った。そこで今回、回答者数を増やし改めて質問項目の選定と信頼性、妥当性の検討を行った。

その結果、ASD 関連の困難を尋ねる質問が 35 項目、ADHD では 34 項目となり、それぞれ 2 つの下位尺度で構成された。各下位尺度は AQ、ADHD-RS のいくつかの下位尺度と相関関係がみられた。また、保護者回答による診断の有無で下位尺度の平均得点を比較すると、診断有りの群の方が有意に得点が高いという結果となった。これらの結果から、ASD・ADHD 傾向による生活上の困難を訪ねる質問紙としては、妥当な項目で構成ができたと考えられる。しかし中学生の自己回答によって日常生活上で抱えている困難の種類を把握ことは難しい可能性が考えられた。本尺度によって、ASD・ADHD 傾向に関連した困難を抱えているかどうかをスクリーニングし、得点が高かった生徒には支援者が個別で面談する等の利用方法が考えられた。

<キーワード>

自閉スペクトラム症 注意欠如・多動症 ASD ADHD 生活上の困難 質問紙

【はじめに】

2012 年に文部科学省が行った調査¹⁾によると、知的な発達に遅れは無いが、学習面または行動面で著しい困難を示す児童や生徒は 6.5%であったと報告されている。この数字に含まれる児童生徒の中には、自閉スペクトラム症 (autism spectrum disorder: 以下、ASD) や注意欠如・多動症 (attention deficit/hyperactivity disorder: 以下、ADHD) といった発達障害や、その傾向を持つ子どもが多数含まれていると考えられる。これは教師から見て学習面や行動面で困難があるとされた児童生徒の割合であるため、実際にはさらに多くの子どもが、日常生活の中で困難を抱えている可能性がある。ASD や ADHD の診断を早期に受け

ている子どもであれば、必要な医療的・福祉的支援を受けている場合が多い。しかし ASD・ADHD 的な傾向を持ちながらも、周囲から見ると大きな問題が生じておらず、本人が日常生活において困っていたとしても、適切な支援を受けられずに過ごしている子どもも一定数存在していると考えられる。

診断は受けていないが ASD や ADHD 傾向により日常生活に何らかの困難を抱えている者をスクリーニングするための尺度として、大学生を対象としたものがすでに開発され^{2),3)}、ASD 関連困り感尺度においては、ASD のある学生の支援ニーズを評価する尺度として有効であったという報告

もある⁴⁾。しかしながら、この尺度は大学生を対象としたものであり、10代前半の子どもにはそのまま使用できるものではなかった。

そこで筆者は2021年度に、中学生を対象としてASD・ADHD的傾向により日常生活で抱えている困難を尋ねるための自記式質問紙の試作版開発を行った⁵⁾。しかし、この研究では2つの課題が残った。1つ目の課題は作成した質問項目に、中学生全般に共通する問題とASD・ADHD的傾向を持つ生徒特有の問題が混在している可能性があるという点である。そして2つ目は、中学生が自身の困っていることを自覚できているのかどうか、回答能力を再検討することが必要な点である。これらは回答者数が少なく、また質問項目間の相関が高かったことから浮かび上がった課題であった。

そこで、これらの課題の検討のために、回答者数を増やし質問項目を再検討すること、また診断の有無による回答への影響を確認することを今回の研究の目的とした。

【方法】

(1) 対象者

長野県松本市内の公立中学校6校の1年生～3年生の生徒1968名とその保護者に質問紙を配布した。

(2) 質問紙

配布した質問紙は3種類であった。1つは筆者が作成したASD46項目、ADHD51項目からなるASD・ADHD的傾向による日常生活上の困難を尋ねるための自記式の質問紙であった。質問項目は既存の尺度や精神科医、発達障害当事者が書いた書籍などから10代前半の発達障害傾向の子どもが日常生活上で抱えやすいと考えられる症状や困

難な状況を収集し、作成を行ったものである。

選択肢は「とても困っている(6点)」「困っている(5点)」「少し困っている(4点)」「あまり困っていない(3点)」「困っていない(2点)」「全く困っていない(1点)」とした。

残りの2つはASDのスクリーニング尺度である日本語版自閉症スペクトラム指数(Autism-Spectrum Quotient: 以下、AQ) 児童用⁶⁾と、ADHDのスクリーニング尺度であるADHD評価スケール(ADHD Rating Scale: 以下、ADHD-RS)⁷⁾であった。

対象生徒は2群に分け、両群の中学生本人に筆者が作成した質問紙を配布した。そして一方の群の保護者にはAQを、もう一方の群の保護者にADHD-RSをあわせて配布した。保護者からは子どものASD・ADHDの診断の有無についても回答を得た。

(3) 手続き

質問紙は2022年6月上旬に学校を通して生徒に配布した。質問紙には研究の趣旨と説明の書面を同封し、調査への協力は任意であり質問紙への回答をもって研究の同意とする旨を通知した。5日～1週間程度の回答期間を経て、回答された質問紙の回収をした。

(4) 統計処理

各項目の分布は正規性が仮定できなかったため、データを順序尺度とみなし分析を行った。項目の弁別力はG-P分析(Good-poor analysis)によって検討し、差の検定はMann-whitneyのU検定を行った。項目間の相関係数はPolychoric相関を用いて算出し、因子分析はカテゴリカル因子分析を行った。妥当性検討のための相関係数はSpearmannの順位相関係数を使用した。統計ソフトはHAD16.3⁸⁾を使用した。

(5) 倫理的配慮

本研究は信州大学医学部医倫理審査委員会にて承認された。(承認番号 5519)

【結果】

(1) 対象者

379 名の中学生とその同数の保護者 (AQ 回答者 214 名、ADHD-RS 回答者 165 名) から回答が得られた。ASD 項目の完全回答は 339 名 (男子 146 名、女子 193 名、平均年齢 $M=13.3$ 歳、 $SD=0.89$ 、有効回答率 89.4%) であり、ADHD 項目の完全回答は 324 名 (男子 138 名、女子 186 名、平均年齢 $M=13.2$ 歳、 $SD=1.43$ 、有効回答率 83.8%) であった。AQ (保護者) の完全回答は 185 名 (母 162 名、父 20 名、その他 1 名、不明 2 名)、ADHD-RS の完全回答は 159 名 (母 143 名、父、13 名、祖父母 1 名、不明 2 名) であった。診断の有無については回答が得られた 379 名のうち、ASD のみの診断が 16 名 (男子 11 名、女子 5 名)、ADHD のみの診断が 4 名 (男子 2 名、女子 3 名)、ASD と ADHD の両方の診断が 9 名 (男子 5 名、女子 2 名) であった。

(2) 項目分析

全項目について平均値は全体的に低くなっており、正の方向に歪みが見られた。つまり、「困っていない」方向に回答の分布が偏っていた。

各項目の弁別力の検討を行った。質問項目について、全項目の平均得点が高かった上位群 25% と平均得点の低かった下位群 25% との差に有意な違いがみられれば、その項目は弁別力が高いと言える。今回は、全項目平均得点の上位 25% (ASD: 2.91 点以上、ADHD: 3.22 点以上) を高群、下位 25% (ASD: 1.72 点以下、ADHD: 1.80 点以下) を低群とし、高群と低群の各質問項目の平均値の差について検定を行った。その結果、全ての項目で高群が低群よりも有意に得点が高い ($p<.01$) という結果

となった。

このことから、回答は全体的に「困っていない」方に偏りがあったが、弁別力の問題はみられなかったため生活上で抱えている困難を尋ねる尺度開発という観点からは全ての質問項目は概ね適切であると考えられた。

(3) 項目の削除

項目間の相関について確認したところ、複数の項目同士に強い相関 (.70 以上) がみられた。また、AQ および ADHD-RS の下位尺度の得点との相関を確認したところ、複数の項目において相関が全くないか負の相関を示す項目も存在した。そこで、回答者への負荷を考慮し項目数を減らす必要もあるという観点から、尋ねる困難の網羅性を保つことを考慮しつつ、先に挙げた 2 点の結果を踏まえて質問項目の削除を行った。その結果、ASD 項目が 35 項目、ADHD 項目が 34 項目となった。

(4) ASD 質問項目の因子分析と下位尺度の構成

ASD 質問項目の 35 項目に対して探索的因子分析 (カテゴリーカル因子分析、重みつき最小二乗法、プロマックス回転) を行った。まず、固有値の減衰状態 (13.70, 1.72, 1.49, 1.27, 1.20, 1.15, 1.08 …) および解釈可能性から 2 因子構造が得られた。結果について表 1 に示す。

第 1 因子は「人とトラブルになることが多くて困る」「いじめられることがあって困る」などの他者とのコミュニケーションに関する項目や、「やめられない癖があって困る」「何度もくり返してやりたい癖や行動があって困る」などのこだわりに関する項目などに高い負荷量を示したことから「コミュニケーション、こだわりに関する困難」と名付けた。

第 2 因子は「自由にやっていいと言われると、どう行動したら良いか決められなくて困る」「作

文や作品づくりなどで、自分でテーマを決めるのが苦手で困る」といった想像力に関する項目や、「初めての場所では、とまどうことが多くて困る」「先のスケジュールがわかっていないと不安で困る」といった先の見通しに関する項目などに高い負荷量を示したことから「想像力、見通しに関する困難」と名付けた。

以上の因子分析の結果から、各因子に高い負荷

量を示す項目を用いて尺度を構成し、それらの平均点を尺度得点とした。また、各下位尺度について α 係数を算出したところ、いずれも.90以上の値が得られた。そして2尺度間には中～高い相関($r=.755$)がみられた。各下位尺度の平均値、標準偏差、 α 係数を表2に、下位尺度間の相関分析の結果を表3に示した。

表1 ASD 項目 35 項目の因子負荷行列

項目	因子		
	1	2	共通性
人とトラブルになることが多くて困る	.869	-.170	.562
いじめられることがあって困る	.857	-.242	.480
「ほかの人のことをもっと考えて行動しなさい」などと、注意されることがあって困る	.847	-.101	.598
やめられない癖があって困る	.823	-.045	.623
何度もくり返してやりたい癖や行動があって困る	.804	-.013	.631
気分が波があって困る	.617	.167	.565
自分を傷つけることをしてしまうことがあって困る	.583	.151	.495
机や椅子、壁などにぶつかってしまうことが多くて困る	.552	.153	.455
気が散りやすく困る	.546	.196	.498
においや音、肌にもものが触れる感覚などに鈍感で困る	.541	.123	.409
髪型が変わったりメガネをかけたたりするなどのちょっとした変化で、その人が誰だかわからなくなってしまうことがあって困る	.524	.177	.446
においや音、肌にもものが触れる感覚などに過敏すぎて困る	.504	.151	.392
人の気持ちや考えがわからないことがあって困る	.501	.319	.594
物事に集中しすぎてしまうことがあって困る	.485	.199	.421
人の話を聞くことが苦手で困る	.484	.277	.514
おしゃべりしながら勉強するなど、同時に2つ以上のことをこなすことが苦手で困る	.479	.188	.401
整理整頓が苦手で困る	.472	.050	.261
人にだまされてしまうことがあって困る	.439	.320	.508
スケジュールを管理するのが苦手で困る	.431	.319	.495
細かいことが気になりすぎてしまうことがあって困る	.424	.248	.400
異性とうまく関われなくて困る	.325	.286	.329
自由にやっていいと言われると、どう行動したら良いか決められなくて困る	-.240	.999	.694
作文や作品づくりなどで、自分でテーマを決めるのが苦手で困る	-.305	.993	.622
会話や雑談が苦手で困る	.063	.714	.581
初めての場所では、とまどうことが多くて困る	.058	.694	.546
会話に入るタイミングがわからなくて困る	.207	.642	.655
先のスケジュールがわかっていないと不安で困る	.022	.635	.426
国語の問題で、登場人物の気持ちや考えを聞かれてもよくわからないことがあって困る	.071	.606	.437
あいまいな言葉の意味がわからなくて困る	.217	.585	.582
急な予定変更が苦手で困る	.151	.559	.463
相手の言葉の意味がわからないことがあって困る	.183	.557	.498
友達がうまく作れなくて困る	.194	.546	.496
細かい指示がないと、自分がどう行動すればいいのかわからなくて困る	.250	.543	.562
周りの人がふつうにできていることでも、自分にとってはとても苦手なことがあって困る	.344	.481	.600
新しいことにチャレンジすることが苦手で困る	.290	.481	.525
因子寄与	14.721	14.267	
因子間相関 $r=.755$			

表 2 各尺度得点の平均値、標準偏差、 α 係数

	平均値	標準偏差	α 係数	N
コミュニケーション、こだわりに関する困難	2.22	0.80	.920	339
想像力、見通しに関する困難	2.48	0.96	.917	339

表 3 ASD 項目の各因子と AQ の下位尺度の相関

	AQ下位尺度				
	社会的スキル	注意の切り替え	細部への関心	コミュニケーション	想像力
因子1：コミュニケーション、こだわりに関する困難	.269	.246	.033	.310	.044
因子2：想像力、見通しに関する困難	.385	.327	.056	.309	.050

(5) ASD 質問項目の下位尺度の妥当性検討

因子分析の結果から構成された下位尺度と AQ 得点の下位尺度との相関から妥当性の検討を行った (表 3)。その結果、2 つの下位尺度は AQ の「社会的スキル」「注意の切り替え」「コミュニケーション」との弱い相関がみられた。

続いて診断の有無による回答の違いからも妥当性の検討を行った。診断の有無による各尺度の尺度得点の平均値、標準偏差、U 値、有意確率、効果量を表 4 に示す。尺度得点について、2 つの下位尺度ともに診断の有無により有意な差がみられた。

表 4 ASD の診断の有無による尺度得点

下位尺度	診断無 (n=315)		診断有 (n=24)		U値	自由度	有意確率	効果量 (r)
	平均	SD	平均	SD				
コミュニケーション、こだわりに関する困難尺度	2.18	0.78	2.70	1.00	4911.5	337	.014	0.13
想像力、見通しに関する困難尺度	2.44	0.94	2.98	1.11	4912.0	337	.014	0.13

(6) ADHD 質問項目の因子分析と下位尺度の構成

ADHD 質問項目の 34 項目に対しても探索的因子分析 (カテゴリーカル因子分析、重みつき最小二乗法、プロマックス回転) を行った。まず、固有値の減衰状態 (14.64, 1.73, 1.43, 1.34, 1.21, 1.00 …) および解釈可能性から 2 因子構造が得られた。結果について表 5 に示す。

第 1 因子は「人とトラブルを起こしてしまうことがあって困る」「自分の言動で人をイライラさせてしまうことがあって困る」などの対人関係に

関する項目や、「ルールを守ることが苦手で困る」「時間を守ることが苦手で困る」といった決まり事を守ることに関する項目などが高い負荷量を示したことから「対人関係、決まり事を守ることに関する困難」と名付けた。

第 2 因子は「生活習慣が乱れてしまうことがあって困る」「夜眠れないことがあって困る」などの生活習慣に関する項目や、「難しい課題をするのが苦手で困る」「課題や作業に取りかかるのが苦手で困る」などの課題の遂行に関する項目に高

い負荷量を示したことから「生活習慣、課題の遂行に関する困難」と名付けた。

以上の因子分析の結果から、各因子に高い負荷量を示す項目を用いて尺度を構成し、それらの平均得点を尺度得点とした。また、各下位尺度につ

いて α 係数を算出したところ、いずれも.90以上の値が得られた。そして2尺度間には中～高い相関($r=.768$)がみられた。各下位尺度の平均値、標準偏差、 α 係数を表6に、下位尺度間の相関分析の結果を表7に示した。

表5 ADHD項目34項目の因子負荷行列

項目	因子		
	1	2	共通性
人とトラブルを起こしてしまうことがあって困る	.997	-.226	.699
人の話を聞くのが苦手で困る	.879	-.129	.615
自分の言動で人をイライラさせてしまうことがあって困る	.853	-.072	.638
ルールを守ることが苦手で困る	.848	-.160	.536
時間を守ることが苦手で困る	.753	.042	.617
ほかの人よりもよく叱られて困る	.739	.011	.559
かたづけができなくて困る	.716	.015	.530
順番を待たされるとイライラして困る	.699	-.037	.450
イライラしやすくて困る	.637	.136	.557
身だしなみを人に注意されてしまうことがあって困る	.625	.023	.413
新しい友達を作るのが苦手で困る	.571	.177	.512
必要な物をなくすことがあって困る	.525	.231	.515
集会など、じっとしていなければならない場面がつかなくて困る	.518	.151	.412
次の活動への切り替えが苦手で困る	.500	.298	.568
字がへたで困る	.487	.108	.329
自分はどこか変で人と違うと覚えることがあって困る	.477	.349	.605
気分が波があって困る	.476	.297	.533
読んだ内容を理解するのが苦手で困る	.419	.156	.300
お金を使いすぎてしまうことがあって困る	.412	.275	.419
生活習慣が乱れてしまうことがあって困る	-.248	.926	.567
難しい課題をするのが苦手で困る	-.043	.821	.622
勉強が苦手で困る	-.089	.794	.530
課題や作業に取りかかるのが苦手で困る	.087	.762	.691
期限ギリギリにならないと課題が終わらなくて困る	.055	.743	.617
夜眠れないことがあって困る	-.207	.711	.323
飽きっぽくて困る	.173	.671	.658
物事を最後までやり遂げられなくて困る	.244	.636	.703
朝出かけるまでの準備がたいへんで困る	.055	.631	.455
気が散りやすくて困る	.267	.613	.700
自分に自信がなくて困る	.248	.524	.537
テンションが上がりすぎてしまうことがあって困る	.323	.453	.534
自分が何をすればいいのか分からないときがあって困る	.397	.452	.638
計画性がなくて困る	.373	.446	.594
ぼーっと考えごとをしてしまうことがあって困る	.382	.411	.556
因子寄与	15.610	14.768	
因子間相関 $r=.768$			

表 6 各尺度得点の平均値、標準偏差、 α 係数

	平均値	標準偏差	α 係数	N
因子1：対人関係、決まり事を守ることに関する困難	2.27	0.89	.925	324
因子2：生活習慣、課題遂行に関する困難	2.82	1.11	.932	324

表 7 ADHD 項目の各因子と ADHD-RS の下位尺度の相関

	ADHD-RS下位尺度	
	多動性・衝動性	不注意
因子1：対人関係、決まり事を守ることに関する困難	.304	.303
因子2：生活習慣、課題遂行に関する困難	.312	.368

(7) ADHD 質問項目の下位尺度の妥当性検討

因子分析の結果から構成された下位尺度と ADHD-RS 得点の下位尺度との相関から妥当性の検討を行った (表 7)。その結果、2つの下位尺度は ADHD-RS の「不注意」「多動性・衝動性」との弱い

相関がみられた。

続いて、ASD 質問項目と同様に診断の有無による回答の違いからも妥当性の検討を行ったところ、2つの下位尺度得点ともに診断の有無により有意な差がみられた (表 8)。

表 8 ADHD の診断の有無による尺度得点

下位尺度	診断無 (n=312)		診断有 (n=12)		U値	自由度	有意確率	効果量 (r)
	平均	SD	平均	SD				
対人関係、決まり事を守ることに関する困難尺度	2.23	0.87	3.07	1.04	2758.0	322	.005	0.16
生活習慣、課題遂行に関する困難尺度	2.79	1.10	3.66	1.02	2681.0	323	.011	0.14

【考察】

本研究により ASD 関連の困難を尋ねる質問は 35 項目、ADHD 関連の質問は 34 項目となった。項目の平均値は全体的に「困っていない」方に偏っているものの、下位尺度と外部の尺度との間にある程度の相関がみられ、また効果量は小さいものの診断のある群の方が有意に得点が高くなっていることから、ASD・ADHD 傾向による生活上の困難を尋ねる質問紙としてはある程度妥当な項目で構成できたと考えられる。

また今回も試作版開発時と同様に ASD, ADHD 項目共に 2 因子解を選択した。理由は 3 因子以上の解を求めても、解釈可能な形で第 3 因子以降の

因子に高い負荷量を示す項目が十分にみられなかったことによる。これは項目間の相関が全体的に高かったことに起因すると考えられる。つまり ASD・ADHD 傾向の困難を抱えていない生徒は全体的に「困っていない」方へ回答し、困難を抱えている生徒はほとんどの項目で「困っている」方へ回答をしたことから、項目間の相関が強い結果となったと言える。これは、試作版開発時にもみられた回答パターンである。

試作版開発時には、回答者数が少なかったことから、ASD・ADHD 傾向により日常生活に困難を抱える中学生からの回答が少なく、その結果データ

にある程度の偏りが生じた可能性が考えられた。しかし今回のように回答者を増やしても同じ傾向が見られたことから、中学生の自己回答によって日常生活上で抱えている困難の種類をスクリーニングすることには限界がある可能性が考えられた。ただ、診断の有無により尺度得点に差はみられたことから、本尺度によって ASD・ADHD 傾向に関連した困難を抱えているかどうかをスクリーニングし、得点が高かった生徒には、支援者が個別に面談を行い、どのような困難を抱えているのか一緒に整理をしていく等の運用方法が考えられるだろう。

試作版開発時の課題として挙げられていた、質問項目に中学生全般に共通する問題と ASD・ADHD 傾向を持つ子ども特有の問題が混在している可能性について検討すると、診断の有無により下位尺度の平均得点に有意な違いはみられたものの、その効果量は小さかったことから、今回選定した項目の中には、診断がある生徒とない生徒の弁別力が低い項目もまだいくつか含まれていると考えられる。大学生版の尺度では、短縮版の開発も行われており⁹⁾、中学生版の尺度も使い勝手を考慮すると短縮版の作成をすることも必要だと考えられる。短縮版作成時には診断の有無に、より弁別力の高い項目から尺度を構成するという方法で検討していく必要がある。

このようにいくつかの課題が挙げられるものの、今回の研究の結果、ASD・ADHD 傾向の中学生が抱える日常生活上の困難を尋ねるための質問紙は、既存のスクリーニング尺度との関連や診断の有無による回答の違いがみられたことから、困難を抱える中学生を拾い上げるためには有用だといえるだろう。

【引用文献】

- 1) 大南英明(研究代表者)：通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課、2012
- 2) 岩渕未紗、高橋知音：大学生の ADHD 困り感質問紙の作成、信州心理臨床紀要、第 10 号、13-24、2011
- 3) 山本奈都実、高橋知音：自閉症スペクトラム障害と同様の行動傾向を持つと考えられる大学生の支援ニーズ把握の質問紙の開発、信州心理臨床紀要、第 8 号、35-45、2009
- 4) 高橋知音、金子稔、山崎勇、小田佳代子、紺野美保子：ASD 関連困り感尺度の妥当性の検討：診断の有無による得点の比較、CAMPUS HEALTH、54 (2)、204-210、2017
- 5) 久保木智洗、高橋知音、本田秀夫、鷲塚伸介：自閉スペクトラム症および注意欠如・多動症傾向の中学生が抱える日常生活上の困り感を尋ねるための自記式質問紙の試作版開発、信州大学教育学部研究論集、第 16 号、49-62、2022
- 6) 若林明雄、東條吉邦、Simon Baron-Cohen、Sally Wheelwright：自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化、心理学研究、第 75 巻、第 1 号、78-84、2004
- 7) 市川宏伸・田中康雄監修、坂本律訳：診断・対応のための ADHD 評価スケール ADHD-RS (DSM 準拠) チェックリスト 標準値とその臨床的解釈、明石書店、2008
- 8) 清水裕士：フリーの統計分析ソフト HAD:機能の紹介と統計学習・教育、研究実践における利用方法の提案、メディア・情報・コミュニケーション研究、1、59-73、2016
- 9) 山崎勇、高橋知音、岩渕未紗、小田佳代子、

徳吉清香、金子稔：UPI-RS、ADHD・ASD 困り感質
問紙の短縮統合版の試作、CAMPUS HEALTH、49(3)、
67-72、2012